



Walk with Children めぐる

大人 子供

せいび

198号
2024年2月

そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて言われた。「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」

(マタイ18章1-3節)

校長 シスター小島理恵

1月の「まごころ献金」の前日、この日の献金はすべて、能登半島の地震で被害に遭われた方々のためにお送りすることを朝礼で伝えました。翌日、高学年の一人の子どもが、「校長先生、ぼく、今日は自分のお小遣いを全部献金しました！」と笑顔で話しかけてきました。きらきらとした目からは喜んで献金したことが窺え、とても清々しい気持ちになりました。また、中学年の一人は、自分で「肩たたき」や「お皿洗い」などのお手伝いをして5円、10円と貯めたお金を献金として持ってきていたようです。

イエス様の言う「子どものようにならなければ」とは、このような子ども達の心を言っているのではないのでしょうか。自分の利益よりも他者の必要に目を向け、自分にできる協力をしたい、自分を犠牲にしても誰かのために、という優しさは、心に自然に湧き上がってくる神様からの贈り物だと感じます。大人になるにつれてだんだんと損得を考えたり、駆け引きに頭を回転させたりすることがあります。そんな時こそ、このみことばを思い出していきたいと思います。

今年に入って、新たに新型コロナウイルスの感染者が国内で増加傾向にあります。学校でも、感染防止対策に努めてまいりたいと思います。

コンネッショナー
Connessione ~つながり~

「Connessione」とは、イタリア語で「つながり」を意味する言葉です。

ここではキリスト教とのつながりを大切にするための豆知識を紹介していきます。

すると、たちまち目から鱗のようなものが落ち、サウロは元通り見えるようになった。

使徒言行録 9章18節

先日、5年生の宗教の授業を見に行きました。『サウロの回心』について学ぶ授業の中で、児童が最も大きく反応したのは、『目から鱗が落ちる』という諺が、聖書の箇所を語源とすると言われていることを知った時の驚きでした。

イエスを信じるキリスト教徒をひどく迫害しているサウロが、ダマスコという町に近づいた時、突然雷に打たれるような経験を経験します。彼は後に、これがイエスに出会った出来事だと書いています。彼はそのことによって目が見えなくなり、人々に手を引かれ、ダマスコまで連れて行かれました。そして、彼はキリスト教徒のアナニアという人に偶然出会います。アナニアはパウロに対して親しく呼びかけ彼のために祈りました。すると、目からうろこのようなものが落ち、元通り目が見えるようになったと聖書は記しています。

これは、私達のまわりにいるたくさんの人々の中に私達の目から鱗を落としてくれるような存在がいることや、これから出会うたくさんの人々の中に、ふとしたきっかけで、わたしたちの目の鱗を落としてくれる存在がいること。そしてそのことによって、私達自身が変わられていくことを示しています。

私達は多くの事柄を知らないまま、自分のものさしで物事を見て、判断して済ませています。つまり、目に鱗がついたままにいるのだと思います。もっと神様の声に耳を傾け、知り、考え、神様に望まれる真理を見極めていかなくてはなりません。

今年度が終わろうとしています。この後の一年間にも目から鱗が落ちるきっかけが散りばめられているはずですが、私達が神様に向き直すきっかけに気がつく心をもって4月を迎えられますよう、残りの1ヶ月、誠実に人や物事と出会いながら歩めるようお祈りしてまいります。

1月の学校より～

ラウラ・ヴィクローニャの記念

P.A.M.では、目黒星美のみんなのために自分たちができることは何か、ということを決断しながら活動をしていきます。特にラウラはP.A.M.にとっては思い入れのある聖人であり、お手本としている存在です。そのラウラについて目黒星美のみんなに知ってもらい、ともに目指せるようになったら、それは学校のみんなのためになるはずだという思いから、先生方へインタビューをしたり、調べたりしていました。どのように伝えたら、目黒星美のみんなが身近に感じてもらえるのかを熱心に話し合いました。



6年

ラウラは、小さなことでも一生懸命に努力をし、人が面倒に思うことでも、率先して行っていました。嫌いな食べ物が出て、「イエス様のことを思えば、なんともない」と言って残さず食べていました。ラウラは、家族思いで、最後は、お母さんのために命を捧げました。わたしは、ラウラの生き方を通して他者を思いやる心を学びました。お祝いに向けてクイズを作ったり、台本を読んだりと下級生と練習に励みました。練習している姿を見て、下級生にP.A.M.のバトンを渡せるくらい、頼もしく感じました。

生活委員会の取り組み

全校児童が気持ちの良い一日のスタートを切ることができるように、まずは自分達からという思いを持ち、学校が元気な挨拶で一杯になるよう努めています。また校内での安全な移動を呼び掛けたり、服装の乱れがないようにと声を掛けたりしています。

生活委員会として

5年

私達は、主に3つの活動をしています。朝のあいさつ活動、身だしなみを整えるための呼びかけをしています。現在はみんながより意識できるようにマネキン人形を作っています。他にもポスターをかいています。あいさつ活動では、みんながあいさつをすることで晴れやかな気分になれるよう明るい声掛けをしています。基本的な生活をみんなが身に付けられるように、日々頑張っています。この学校の生活委員会としてほこりを持って活動していきたいと思えます。



ドン・ボスコのお祝い

今年度は、4年ぶりに全校児童と5年生の保護者の方々と体育館に集うことができました。今年のドン・ボスコ週間は、イタリア語の5つの言葉である、「con amore ところをこめて」「Faccio io わたしがやります」などから徳の花を実行してきました。5年生の宗教劇「ドン・ボスコは君たちのもの」は、どの場面も声がよく通り、素晴らしい演技でした。5年生一丸となり、歌や踊りでドン・ボスコの生涯を伝えようと懸命に練習を積み重ねてきた努力が伝わってきました。ドン・ボスコショーでも、各クラスの代表の人達が楽しそうに演技していて、とてもよかったです。私たちも、クラスで考えたドン・ボスコのついでに言葉やそれをそれぞれの席から発表しました。クイズでも、皆で楽しむことができ、よかったです。と、6年生が5年生に向けて感想を伝えていました。先生が扮したドン・ボスコも登場し、皆で作り上げ祝うことができた「ドン・ボスコの祝日の集い」でした。

百年前の少年たちとドン・ボスコ

5年

ぼくは、やりたいと思っていたつっぱり少年の役を演じました。約百年前の少年達がどれだけ苦しい生活を送っていたのかということが、みんなに伝わるように工夫して演じることでとてもよく分かりました。また、ドン・ボスコがそばにいてくれたことで、心が明るくなっていった少年達を演じる中で、ドン・ボスコの優しさを知ることができました。これからの生活で、少しでもドン・ボスコに近づけるように努力したいと思います。

ドン・ボスコ劇

5年

僕は、アントニオの役が自分に似合っていると思ったので、立候補しました。オーディションがあったので、家でセリフを沢山練習し、お母さんにもみてもらいました。アントニオの役をもらい、とても嬉しかったです。練習を重ね、本番の日が来ました。最後の帽子をたたきつける演技で、観ている皆から笑う声ももれていることを感じ、演技がうまくいったなと僕は嬉しくなりました。今回の劇を通じて、みんなで一つの劇を成功させることができ、良い達成感を感じることができました。



みんなで力を合わせた宗教劇

5年

みんなで練習するのがとても楽しかったです。なぜならアドバイスをし合って良い劇になったからです。緊張して大きな声でセリフが言えなかった時もみんなが大丈夫大丈夫と声をかけてくれて勇気が出てきました。本番、友達が、「がんばって、理乃ならできる。」と言ってくれたので一番良いパフォーマンスができました。これまでにない達成感と喜び、協力することの大切さを強く学ぶことができました。楽しかったです。

ドン・ボスコ劇

5年

私は少年役でずっと舞台にいたので、動きをつけるのが大変で、アドリブを入れながら変えていきました。リハーサルは緊張したけれど200%出せたので、出来たことが本番を迎える勇気になりました。本番は代役の子が上手に演技してくれました。みんなで休みの子の分もフォローしてクラスの友情がとても深まった経験になりました。劇を通して協力し合うという大切なことに気づいたので残りの5年生も他学年の見本になろうと思います。



大谷翔平選手からのグローブ

先日、本校にも大谷翔平選手からグローブが届きました。細谷教頭から体育館での朝礼時に全校児童へ紹介があり、6年生の男子2名にデモンストレーションとしてキャッチボールをしてもらいました。勢いのあるボールを「バシン、バシン」とグローブで捕球するたびに歓声が上がりました。この時の子ども達の目の輝きをいつまでも大切にしていけるよう見守っていきます。

6年

舞台に出たとき、とても緊張していて、ボールをうまくキャッチできるか不安でした。しかしグローブが柔らかくて取りやすかったので、うまくキャッチボールをすることができました。

また、舞台の上では自分の夢をみんなに発表しました。その夢は「大谷選手のように優しい人になりたい。」というものでした。その夢に向かって、僕は中学校で困っている人のために力を使えるように頑張りたいです。



6年

ぼくは体育館の舞台上で、大谷選手からいただいたグローブを使ってキャッチボールをしました。舞台上上がる前はとても緊張しました。キャッチボールが始まった時も、ミスをしたか心配でした。しかし、上手に投げることができ、安心しました。他の児童にも大谷選手のグローブを使ってキャッチボールを楽しんでほしいです。

大谷選手にはドジャースでも頑張ってもらいたいと思います。



朝マラソン・朝縄跳び

吐く息が真っ白な早朝の校庭に、子どもたちの元気いっばいに走る姿がやってきました。体育館では同じ時間にそれぞれの目当てを持って取り組む、なわとびも始まりました。「今日は20周走った!」「二重跳びができるようになった!!」などの喜びの声を聞くことができました。達成した喜びを味わい、さらなる目当てに向かって積極的に取り組む姿勢が成長につながっていました。

